随想

あと十八回

竹内明子

「死ぬまでに二十回はパリに行くワ」と家人や友人に半ば本気で公言して二年になる。どうしようもないこの「パリ病」にとりつかれたのは、二年前ヨーロッパ各地を馳け足で巡ったのがそもそもの始まりで、それ以来、回りの者が呆れる程「パリ、パリ」と日増しに思いは募るばかり。「パリのどこがそんなにいいの？そりゃあ街全体が詩情に溢れていて全てが絵になるなんて云うけど案外住みにくいって言うじゃない」――なる程そう云えば街の店員も不愛想なのが多かったし、お昼時など第一座って食べてる人などごく稀れで（立喰いの方が安くつく）コップ一杯の水が六十円も取られトイレだってタダじゃない。それによく喋るし自己主張も強烈だ。それなのに、こうまで人の心を惹きつけてやまないのは一体何なのか――とうとう病いこうじてこの春再びパリを訪れた。すでに見覚えのある教会や寺院、美術館や庭園、ユトリロの絵を思わせる街並みや橋、それに過ぎし日の栄光や苦悩を今に伝える数々のモニュメント――パリは相変らず詩情に溢れていて歴史の香りが匂い立っていた。街は歴史を繰広げた只の舞台というのではなく、一つの芸術作品と呼ぶにふさわしい。――こんなパリを歩いていて今度はあっちこっちで「工事中」が目についた。宿をとったモンパルナス界隈など高層建築が林立し、かってモジリアニやゴーギャンが無名時代を過ごしたと云う良き時代の面影は、片隅に押しやられたカフェでしか偲ぶ他ない。聞けばパリには十五・六世紀に建てられたという古い家屋が今尚多く、日あたりは悪いしトイレは共同、お風呂もないという世帯が三〇パーセントもあるという。そこで押寄せる近代化の波に「美観が損われる」と嘆く人もいるが長い歴史のある街だけにその問題は一層深刻らしい。しかしノートルダム寺院の広場に地下駐車場を作る際、遺跡が発見されるや直ちに工事は中止、学術研究が開始された、なんて話を聞くと「さすが」と思ってしまうし爽やかである。こういった「ものの考え方」というか「社会全体の感受性の高さ」みたいなものが、これまでパリの街の個性を創り出してきたのだと思うし多くの人々を魅了して来たのではなかろうか。それにしても、ここはどうしてこうも大人達が堂々としているのだろう。お茶を飲むにも食事をするにも大いに楽しんでいる大人達、テレビをひねってもオジサンが喋りオバサンが唄っている。全てにおいてジャリが幅を利かせている日本とは大変勝手が違う。人も三十を過ぎないと一人前に扱って貰えないのか、どんな場面にもこの大人の持つ成熟度が要求される様である。だからパリに居ると♪青春時代は夢なんて♪こんな歌を実感こめて唄う自分がおかしく、むしろ自分もやっと認めてもらえる年頃かしらと、えらく若返った思いをさせてくれる街なのである。この先、近代化と云う波でこの街の外観も確実に変って行くに違いないが、磨きぬかれた大人文化に支えられているパリは、この街を愛する私を決して失望させる様な事はしないだろう。

（主婦）

童話の心は母心

渡辺徹

ほぼ満席のデパート・ホールの前列右側に私はすわっている。司会をする関係で童話者と聴衆をちょうど横から見る格好になった。前列真正面の席にいた子どもが身を乗り出すように無心になって聞きいっている。まさに話し手の芸を感じさせるひとときであった。五月三日に行われた熊日童話会二十五周年記念の「童話と講演の会」でのことである。

「子どもと共に聞かれた親さん方は、なんとすばらしい話し方だと感嘆されたでしょうが、あなただってちゃんと童話ができます。」

「童話を子どもの前で、この私が、とんでもございません。え、そりゃあ、先生方は童話の専門家ですから……。」

と、ある母親は言う。

「いやぁ、専門家とのおほめは恐縮のきわまりですが、ちょっと待ってください。童話というのを一つの作品をまる暗記して話す。大勢の子どもの前で話す。しかも身ぶり手ぶりで上手に話す。という現象面だけ考えれば、（とんでもございません。）という気持ちはよくわかりますが、もう一歩広く童話を考えて、子どもがたのしく目を輝かせて聞く話と考えてみましょう。

子どもは、正直で、お話がおもしろくなければ絶対聞いてくれません。まあまあおつき合いで聞いてやろうとか、今、おしゃべりしたり、あくびをすると世間体が悪いからとか考えません。では子どもが心底耳をすましてくれる話ってあるのかと思われるでしょう。ところがあるのです。

大人であれば誰でもが持っている作品。しかも丸暗記している作品があります。それに子どもに受けることまちがいなしです。あとは、あなたの本音を尊重するかしないかの決断一つなのです。ここまで申せばもうおわかりでしょう。ほれ、『あなたの子どもの頃の話』あなたが主人公のあの大ロマンの作品。この世の中にたった一つしかないあのめい作ですよ。私にはあります。あります。ふとんに世界地図をかき、そっと押入れにしまいこみ、なにくわぬ顔で学校に出かけためい作。ボスがこわくて遠まわり道して帰っためい作。宿題忘れて、何と言いのがれしようとロ実を真剣に考えためい作。窓ガラスを石投げで割り、当家のおばさんのけんまくにおそれて、川の中を逃げ回っためい作。などなど……。

なぁんだ、そんなことかと思われるでしょう。どうぞおためしになってください。早速今日からでも。子どもはきっと、ほほえんであなたを見なおすでしょう。」

童話の安達大先輩はいい残している。「教育と童話を考えるならば、それは乳ぶさにすがる子どもの心。乳ぶさを与える母の心。その無心の中に無限の愛があることと同じである。」と、まさにあのホールで無心に童話に聞き入る子どもの姿は、母心につつまれたものであると思う。童話とつき合って二十五年、銀から金へとまだまだ続いていく。

（鹿本郡植木小学校教諭）

「講師」からの注文

高千穂正史

各種の会合に、おこがましくも「講師」として参加させていただくことが多い。月に、七十回をこえることもある。

大きな催しは勿論のこと、どんな小さな集まりでも、その主催者の心配やご苦労は大変だと思う。

その上に注文をつけるのは、ちょっと気が引けるし、思い上ったことのようだが、本誌の読者には、そのような立場になられる方が多いと思うので、遠慮なく「講師」の側からの注文や、気付いたことを書かせていただく。

◎出講依頼

これは電話にかぎる。こまかいところまで打ち合わせができる。「電話では八礼だ」とおっしゃる方もあるが、もう、そんな時代ではない。

「わざわざ頼みに行くと、ことわらっさんど」とお考えのむきもある。しかし、おいでになるのは、気持ちの負担になって、どうも困る。「そこがつけ目」とおっしゃるが、そんな人間関係はあまりスマートではない。

◎「はがき」を一枚

はなしがきまったら、面倒だが「はがき」でいい、日時や場所、主催者の電話番号を書き入れたものをいただきたい。人間のしごつです。つい月や時間を間違えてこちらのメモに記入していることがある。万一の場合の連絡先きも必要。

◎前日に電話を

そして、前の日にもう一度「だめ押し」の電話を。

これは、とても大切なこと。私も、これで救われたことが何度かある。

◎紹介は簡単に

「講師紹介」はなるべく簡単に。なかには、こちらがしゃべろうと思っている内容に似たことを、ながながと話されるかたもある。これには困ってしまう。聞く方もくたびれる。

◎拡声装置

これだけ文明が進んだというのに、スピーカーの調子というものは、もうちょっとどうにかならんもんですかね。

◎手ふき

テーブルには、水の準備より、「お手ふき」をお願いしたい。チョークの粉という奴、どうも困るのです。

◎こども

小さなこどもを連れて、会に参加し、講演を聞いて下さる熱意には敬服する。しかし、二、三人のこどもの泣き声や騒ぎが、全部のひとに迷惑をかける。話すものもやりにくい。講演を主催するものは、臨時の「託児室」を準備すべきだと思う。

母親がついてきているのに、走ってさろくこどもがおるが、ああいうのは〝こども〟でなくて〝餓鬼〟だ。それを叱らん、またじっとさせきらん奴は、おやではない。

◎接待無用

講演のあとの接待が、私は一番苦手である。帰る列車かバスまで時間があったら、ひとりでその町を歩きたい。

◎講演の謝礼

正直いって、お話しにならんので書く気にもならん。

（仏厳寺住職）